

東京バッハ合唱団 月報

[第 657 号] 2017 年 3 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No. 657

March 2017

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

《口短調ミサ曲》第 2 部の「ニケア信条」について

小海 基 (団員、荻窪教会牧師)

正確には「ニカイア・コンスタンティノポリス信条」と言います。キリスト教は初期から迫害の時代を迎えたせいでしょうが、「お前たちの信じている内容は一言でいうと何なのか」と法廷や取り調べ現場で証言させられる場面を何度も経験してきました。「一言でなんてとても無理です。聖書でさえ 66 巻あるのですから……」などと応えていられません。そういうことで古くから「使徒信条」とか「ニケア・コンスタンティノポリス信条」というような「エキュメニカル信条」(他にもアタナシウス信条、カルケドン信条……といったものがあります)が生まれました。これまでもこれらの信条を私たちが告白すると語っていましたが、プロテスタントの側では、私も編集に参加した『讚美歌 21』(93-4-2 として収録)が出版されるまではほとんど「使徒信条」しか信徒の目に触れることはありませんでした。当合唱団に属するカトリック信者の方々に今確認したのですが、カトリックの方でも今から半世紀ほど前の第 2 バチカン公会議を経ていぶん経ってから「ニケア・コンスタンティノポリス信条」を礼拝で唱えるようになったようです。「使徒信条」に比べて 3 倍以上も長くなっていて、礼拝で唱えにくいことが原因しているでしょう。

印刷してお渡しした(*)「ニケア・コンスタンティノポリス信条」は 1980 年の日本キリスト教協議会(NCC)総会に報告され承認を受けた NCC「信仰と職制」委員会訳です。並べて印刷されている「使徒信条」と比較して 2 つの大きな特徴に気づかれるでしょう(*: 次ページの対照表参照)。

まず「使徒信条」は「我は」と 1 人称単数形で告白しているのに比べて、「ニケア・コンスタンティノポリス信条」の方は「私たちは」と 1 人称複数形で告白されていることです。これは「使徒信条」がそれぞれの信徒の「洗礼式」の誓願で用いられてきたのに比べ、「ニケア・コンスタンティノポリス信条」の方は「私たち」の信仰、つまり教会の信仰を一つにするという政治的目的で作られたことを意味します。

紀元後 313 年に、ローマ帝国のコンスタンティヌス皇帝によってキリスト教は「公認」されますが、それ以降、キリスト教の主流派・非主流派が主として「三位一体」をめぐる、どちらの信仰が「正統」でど

ちが「異端」かというドロドロしたせめぎ合いをはじめます。325 年の「ニケア公会議」でアタナシウスたちの三位一体派が「正統」、アリウスたちが「異端」とされたことで決着したと、皆さんは世界史の教科書で習ったと思いますが、現代にいたるまで決して決着せず、「非三位一体」派であるネストリウス派は「景教」としてアジアに(おそらくは弘法大師によって日本仏教へ、など)大きな影響を与え続けますし、現在「東方正教会」の一つであるエチオピアの「コプト正教会」は三位一体を認めず、イスラムやユダヤ教徒と同じ「唯一神教」を主張します。またプロテスタント側にも「ユニテリアン」や「ユニヴァーサリスト」と呼ばれる「非三位一体」派が生まれています。このあたりのドロドロとした政治的背景については、カトリック作家辻邦生の小説『背教者ユリアヌス』(新潮社)によく描かれています。

この三位一体論争は、そもそも初期キリスト教の中のカルト化を防ぐ目的でなされたものだったのですが、現在の教会が直面するカルト宗教問題ではあまり役に立っていません。そもそも「俺もメシアだ」、「俺もキリストだ」と自称する教祖を生まないための三位一体論であったはずなのに、なまじ三位一体派が「正統」であると政治決着すると、自分たちは「三位一体」の信仰に立っている、と口先で主張さえすれば良いことになってしまい、抑止効果が無くなってしまったのです。しかしそういう背景からでしょう、「使徒信条」と比較して「ニケア・コンスタンティノポリス信条」の第 2 項「イエス・キリスト」の部分が異様に長いことにお気づきだと思います。これは古代教会が「使徒信条」の方の第 2 項「イエス・キリスト」の告白だけでは「俺もメシアだ」、「俺もキリストだ」と自称する教祖発生を防ぎきれないという思いから、非聖書的表現である「イエス・キリストは神と本質を同質にする(ホモウーシオス)」という告白を採択したことによるのです。「本質を同質にする(ホモウーシオス)」などは

月報 3 月号 CONTENTS (増頁・全 6 頁)

- ・「田中克彦自伝」出版記念会(大村恵美子) … p. 3
- ・要約「カントル・バッハ」[2](松尾茂春) … p. 4
- ・西川 豪さん、ヴァイオリン独奏を披露 … p. 4

使徒信条とニケア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）対照表

使徒信条	ニケア信条（ニカイア・コンスタンティノポリス信条）
<p>我は天地の造り主、 全能の父なる神を信ず。 我はその独り子、 我らの主、 イエス・キリストを信ず。 主は聖霊によりてやどり、 処女(おとめ)マリヤより生れ、 ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、 十字架につけられ、 死にて葬られ、 陰府(よみ)にくだり、 三日目に死人のうちよりよみがえり、 天に昇り、 全能の父なる神の右に座したまえり、 かしこより来りて、 生ける者と死ねる者とを審きたまわん。 我は聖霊を信ず、 聖なる公同の教会、 聖徒の交わり、 罪の赦し(ゆるし)、 身体のよみがえり、 永遠(とこしえ)の生命(いのち)を信ず。 アーメン。</p>	<p>私たちは、ただひとりの神、すべてを支配される父、 天と地と見えるものと見えないものすべての造り主を信じます。 またただひとりの主イエス・キリストを信じます。 主は神の御子、御ひとり子であって、 世々に先立って父から生まれ、光からの光、 まことの神からのまことの神、 造られたのでなくて生まれ、 父と同質であって、 すべてのものは主によって造られました。 主は人間である私たちのため、私たちの救いのために、 天からくだり、 聖霊によりおとめマリヤによって受肉し、人となり、 私たちのためにポンテオ・ピラトのもとで十字架につけられ、 苦しみを受け、葬られ、聖書にあるとおりの三日目に復活し、 天にのぼられました。 そして父の右に座しておられます。 また生きている者と死んだ者とをさばくために、栄光のうちに再び来られます。 そのみ国は終わることがありません。 また聖霊を信じます。 聖霊は主、いのちの与え主であり、 父(と子)から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。 そして預言者によって語られました。 私たちは、ひとつの聖なる公同の使徒的な教会を信じます。 罪のゆるしのためのひとつのバプテスマを認めます。 死者の復活と、来るべき世のいのちを待ち望みます。アーメン。</p>
<p>(出典：「讃美歌 21」93-4-1。プロテスタント・日本キリスト教団で採用の訳。宗派・教派や教団により訳語に若干の違いがある)</p>	<p>(出典：「讃美歌 21」93-4-2。日本キリスト教協議会共同訳)</p>

新約聖書のどこにも出てこない言葉なのですが……。もっとも、「本質が同質」ではない「同類質(ホモイウーシオス)」なのだから、「類似(ホモイオス)」というべきだとか、「異質(アノイモス)」なのだから、なまじ聖書の表現に基づいていないものですから、論争は解釈だけではどうにも決着がつかません。結局、政治決着となったわけです。

こういう決着は後々まで尾を引きます。今年 2017 年は宗教改革 500 年ですが、500 年前のカトリックとプロテスタントの「聖餐論争」が「化体説」の論争「聖餐・ミサで食べるパンと葡萄酒が、司祭の聖別の祈りと共にキリストの肉と血に同質(ホモイウーシオス)に実体変化するというカトリックに対し、プロテスタント側は反対した」であったことは皆さんもご存知でしょう。また西側の西方カトリック教会は、聖画や聖像を見てもそうですが、どんどん勝手に変化を取り入れていく癖があります。モーセの十戒の第 2 戒「刻んだ像を作ってはならない」を、勝手に第 1 戒「神以外の何物をも拝んではならない」と合体させて、聖像・聖画・ステンドグラスを奨励します。東方正教会は周りがイスラム圏やユダヤ圏であったこともあり、第 2 戒を守ることに忠実で、イコンは絵ではなくシンボルであると、何世紀にわたっても同じ構図、同じ逆遠近法でちょっと不気味なくらいに絵画的リアリティーを排そうと努めます。

「ニケア・コンスタンティノポリス信条」においても同様なことが起こります。第 3 項の「聖霊」のところで、「父(と子)から出て」と、「と子」が丸かっことで囲まれていることにお気づきでしょう。ラテン語でこの部分「子からも」は「フィリオ・クエ」という言葉なのですが、写本をたどっていくと、そもそもギリシア語原典にこの言葉は無かったのです。紀元後 589 年の第 3 トレド公会議において、西方ローマ・カトリック教会側が突然この言葉「子からも(フィリオ・クエ)」を付けたものですから、8 世紀以降大論争に発展し、11 世紀に東西分裂の原因となってしまいます。なにしろ「ニケア・コンスタンティノポリス信条」は、政治決着とはいえ、この信仰こそが「正統」な「わたしたち」の「一つ」の信仰、「一致点」なのだと公会議で定め、その一致を守るために血で血を洗うような「異端」排除を繰り返してきた歴史を持つわけですから、東方教会側からすれば、どうして西方カトリック教会はいとも軽々しく簡単に「子からも(フィリオ・クエ)」を付けるのかと怒ってしまうわけです。もっともローマを中心としたヨーロッパ世界を制していた西方教会ですから、力づくで「フィリオ・クエ」付きを「正統」と公認します(1014 年教皇ベネディクトゥス 8 世、1274 年第 2 リヨン公会議)。プロテスタントもローマ・カトリックから宗教改革で分かれていますから、ルターもカルヴァンもカール・バルトも「フィリオ・クエ」付

きを主張します。これが悪名高い「フィリオ・クエ論争」です。この段階で、宗教改革的に「聖書では……」と論争しても、「ニケア・コンスタンティノポリス信条」が聖書的言語で「正統」・「異端」論争しているわけではないので、あまり意味はありません。それなのにプロテスタント陣営では、ヨハネによる福音書 15: 26～27 のイエス・キリストの言葉は聖霊が「父から」だけの発出だと取れるが、同福音書 20: 19～23 の復活したイエス・キリストの言葉によれば「子からも（フィリオ・クエ）」とも取れると、自己弁明して余計論争がややこしくなっていくのです。

現在の論争はどうなっているかという点、世界教会協議会（WCC）では、この訳が 1980 年の日本キリスト教協議会（NCC）総会に報告され承認を受けた NCC「信仰と職制」委員会訳であることでもお分かりのように、かつこの中「と子」は読まないことになっています。それがそもそもの東西教会の一致点だったということから出発してエキュメニカル（教会一致）運動を続けていこうとしています。

バッハの《ロ短調ミサ曲》では、こうしたややこしい部分は全部ソリストに任せて、実にさらっと流しています。そして多くのミサ曲において、クレドの部分は、何か教条を唱えているかのような冷たい、面白くない部分になりがちなのですが、さすがはたくさんのカンタータでイエス・キリストの生涯を多彩に歌ってきただけあって、それらのカンタータのパロディも用いて（かえってそれを用いるために何倍も手間がかかるにもかかわらず）深い内容のこもったクレドになっていることは、東京バッハ合唱団で歌っている皆さんには良くお分かりだと思います。この部分をラテン語で歌ってすましてしまうのではなく、日本語で歌うからこそ、カンタータとの連続性も一層感じられるというものです。バッハの時代は、ルター派も「正統主義」の時代、カトリックも「対抗宗教改革」の時代で、互いに不寛容に「教条的」に叩き合っていた時代です。プロテスタント陣営の中でさえも、ルター派、改革派、合同派、再洗礼派……と、互いに教条的に裁き合い、喧嘩し合っていた時代です。その対立にルター派のバッハさえも傷ついていました。しかし《ロ短調ミサ曲》の「クレド」はそんな対立をみじんも感じさせないばかりか、豊かな深みとリアリティー、信仰の一致点を感じさせられます。この曲がキリスト教のどんな礼拝堂の中でも、ヴァチカンの聖ピエトロ礼拝堂でも、シスターナ礼拝堂でも、ヴィッテンベルクの礼拝堂でも、カルヴァンのサンピエール礼拝堂でも、国連総会議場でも……、そういう普遍的な「クレド」として歌われてちっとも不思議ではないというのは、こうした「ニケア・コンスタンティノポリス信条」をめぐる対立の歴史と比べるとちょっと不思議な感じがします。

そこに、バッハが込めた思いがあるといえるのではないのでしょうか。[BCT]

『田中克彦 自伝』 出版記念会

2017年2月5日
如水会館

大村 恵美子

田中克彦様

今日は、想定以上に大人数の参加者を集められて、みんなハッピーな時間をすごされ、おめでとうございます。

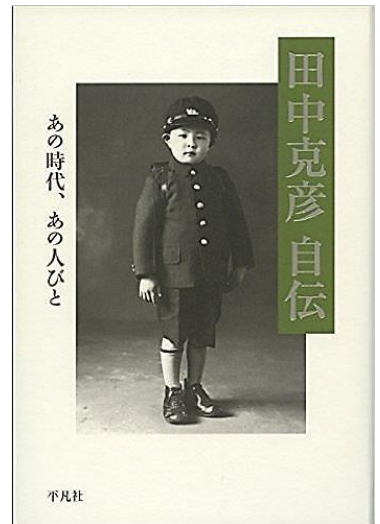
じつは、発行日以前に、ご本のご贈呈を拝受し、その日の夜から早朝に、一気におもしろく読了させていただきました。さっそく、合唱団月報に新刊紹介としてのせようと思い、書いたのですが、なかなか簡潔にまとめることができず、いっそのこと、2月5日の出版お祝い会があるのなら、そのレポにしたほうが、載せやすいかと思って、方針転換しました。

さて、今日伺って、短いスピーチのご依頼を受けましたので、それでは、新刊紹介用に書いたことの要点をスピーチに、と、心づもりしたもの、あの人数でしょう、スピーチしておられる方の声よりもデカイ音の雑談が、とびかっています。とてもこんな聴衆に向かって、まともな発言はできそうもありませんので、要領をえない失礼な結果となってしまいました。それでも、おかげさまで、あとで何人かの方々から、「定演を聴いたことがあります」「こんどのチケットを買いたい」とか、寄ってこられて、ありがたく思いました。

私が読後感として伝えたかったのは、ご尊父や学校の先生方その他、おとなからのよい影響が多かったのが、一番の幸運でいらしたこと。教育委員会を筆頭に、いまの教育界リーダーは全部有害で、学問・教育の本領は、それらの真逆だということでした。また克彦様ご自身の人生に関しては、あなたは涙もろく、マッチョにはなりきれず、ご家庭も、デリケートな奥様をいたわりつづけていらして、お子様方とはすばらしい共生を全うされて今日までいらした、ということですが、とてもひと前では、これらのことは表現しつくされません。

辛うじて今後のこととして伝えられたのは、あなたのご自身で納得なされる生活は、まだ達成できたとは言えず、これからは、もう勝負につながる論争、挑戦（チャレンジ）などは受けて立たないで、愛する方々、対立する方々、どんな方とも心地よい時をすごしてゆかれますように、といったことです。

スピーチでも始めにとりあげましたように、私は知人といえば、団員の加藤剛男さんの参会予定しか知らなかったの、着いたとたんに、モンゴル人の男性が



ニコニコ迎えてくださって、「クリスマス会はたのしくてありがとうございました」と挨拶されたので、すっかり会に溶けこむことができました。

これからのあなたも私も、これが主要なプリンシプルでありたいと思うのです。今や世界情勢は、いがみ合い、殺し合いの始まりとして身構え、警告する向きが強いのですが、そうではなく、ISISだろうがテロリストだろうが、そういう帰結に辿りついた人々の過去には、今正しい側だと確信しているリベラルな人々の心ない侮蔑やいじめがあって、それにさっぱり気づかなかつたという、もっと恐ろしい対人関係の意識の抜け落ちがあったわけです。こう気づいた人々もだんだんふえてはいますが、私はこの線押し出した。私は冗談に、いまの地獄からの脱出のために「神様のお手並み拝見」が、死ぬまでの私のたのしみ、と言っています。

あなたが会の終りのころに、私と加藤さんに「3月9日の浅草・隅田川遠足に参加しますよ」と申しこまれたのは、まさに私の願望の成就であり、また何人かのモンゴルの方々が「今年も荻窪教会でのバッハ合唱団クリスマス会に参加させてください」と笑顔で話しかけてくださったのも、田中克彦様のすばらしい影響です。

殺し合いに没頭している人々、そして何よりも祖国から追われてどこにも行き場のない難民の人々、地上のあらゆる人々に、憎しみではなく、なごみ合いを、積極的に向けて、最晩年をすごしてゆきましょう。ただ1回限りの被災地訪問ではなく、可能な限りの共演を、苦しむ人々に希ってゆきましょう。

公私混同の悪例ではありましようが、この手紙を、2月5日の会合のレポ記事がわりに、月報掲載にしては、という私の考えを、おゆるしいただけましようか。

『田中克彦伝 あの時、あの人びと』2016年12月、平凡社刊

要約『カントル・バッハ』 連載 [2]

マニーフィカト (わが魂は主をあがめ)

ポール・デュ・ブシェ [著]

大村 恵美子 [訳]

要約・紹介: 松尾 茂春 (団員)

<内容>

第1章: ルターのもとでのヨーハン・セバスティアン

(マルティン・ルター、先祖たち、誕生〜リューネブルク時代)

……連載 [1]、月報 653号 (2016年11月号)

◆第2章: 修業時代 (アルンシュタット、ミュールハウゼン)

……連載 [2] (今回)

第3章: 偉大なオルガニスト (ヴァイマル)

第4章: ブランデンブルク協奏曲 (ケーテン)

第5章: カントル・バッハ (ライブツヒ)

第6章: 音楽の献げもの (フリードリヒ大王の客人、歿後)

第2章 修業時代

1702年の復活祭にミカエル学校を卒業したセバスティアンは17歳、大学進学ではなくオルガニストとしての職を探し始めます。新教会のオルガンが建造中だったアルンシュタットに確かな望みがあり、町在住の近親者も尽力してくれました。

・従僕、兼ヴァイオリン奏者

とにかく生計をたてる必要のあるセバスティアンの最初の仕事は、ヴァイマル公弟ヨーハン・エルンストの室内小オーケストラにおける「従僕、兼ヴァイオリン奏者」役でした(1703年3月-7月)。この機会にセバスティアンは作曲家でもあったヴァイオリニスト、

西川 豪さん、ヴァイオリン独奏を披露

昨年秋に初めてのCD(*)をお出しになった西川豪さんが、1月28日、練習後の荻窪教会を訪れ、独奏を披露された。その後、近所で小さな宴席を設け、親子2代のお付き合いに話が弾んだ。豪氏の父上は、芸大ピアノ科在学中に、しばらく当団の練習伴奏者を務めてくださったピアニストの西川秀人氏。母上のヴァイオリニスト、素村裕子さん共々、旧団員にはかつての飲み仲間も多い。写真は、演奏中の西川豪さん。写真提供: 千葉光雄氏 (団員)。

*) 西川豪 Vn/鷺宮美幸 p 「エモーション」OCT エクストン・OVCL-00603 (¥3,000) グリーク:ヴァイオリン・ソナタ第3番、シューマン:ヴァイオリン・ソナタ第2番、パラディス:シチリア舞曲、バッハ:無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番〜サラバンド、同:無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第3番〜ラルゴ、クライスラー:中国の太鼓。



■「CDジャーナル」2016年12月号・評(進) グリークとシューマンのソナタを中心に、バッハやクライスラー、さらには作曲家・ピアニストのパラディスの作品も収めた意欲盤。情熱的な表現を持ち味としながら、それを客観視し、決してロマンティズムに溺れてしまわない冷静さも持ち合わせているため、解釈のひとつひとつに強い根拠を感じさせる。

■「レコード芸術」2016年12月号・評(中村孝義) 東京芸大で澤和樹やジェラルド・ブーレに学び、さらにフェリックス・アーヨなどの薫陶も受けた西川豪が初めてのアルバムをリリースした。こうしたアルバムを耳にしていると、有名コンクールに入ったとか入らなかったとかいうことは別に、我が国の若い世代のヴァイオリニストたちが地道に研鑽と活動を重ね、中身の充実した演奏へと至っていることを如実に感じる。最初のグリークの第3番のソナタからして、演奏は激しい情熱と表現意欲に満ちており、西川の精神的充実を十分に感じさせる。第1楽章における劇的表現だけでなく、第2楽章における深い抒情性に裏打ちされた緻密で情感豊かな表現にも心惹かれた。それにヴァイオリンの音自体も、けばけばしいところの一切ない実にこまやかな美しいものだが、それを誇示するのではなく、作品の内実表現に奉仕させているのも好ましい。つづくシューマンのソナタ第2番でも、西川の作品に対する姿勢に基本的な違いはない。下手をすると晦渋さばかりが目立つ作品だが、西川の表現はむしろきわめて平明で明快である。それは彼がこの作品に抱いている共感の大きさがなさしめるものだろう。忘れてはならないのが両作品で実に恰幅の大きな、それでいて緻密な美しさもあるピアノを奏でている鷺宮美幸の好演。両者のコンビネーションは上出来といってもよいだろう。ほかに収められた小曲の演奏も説得力豊かな好演ぞろいである。

昨年11月号の連載第1回につづき、団員の松尾茂春氏に要約をお願いした、デュ・ブシェ著（大村訳）『カントル・バッハ』の紹介をお届けします。松尾さんの要領を得たまとめと現地演奏旅行の思い出も添えていただき、バッハの生涯と時代が、より簡潔にいきいきと蘇ってきます。原著者や訳出の経緯等については前回に触れました。当団ホームページ「月報・バックナンバー」（号数は上掲）でご参照戴けますが、掲載号の郵送も可能です。ご請求ください（大村恵美子）。

J・パウル・フォン・ヴェストフと出会い、その二重弦の奏法を観察、後に作曲するケーテン時代の「無伴奏」作品に活かすこととなります。またイタリアのヴァイオリンの巨匠たちの作品を発見し活かします。イタリアとドイツ、フランスとドイツ、この振り子運動の中に身を置きつつ、揺り動かされることなく汲み取り、通過と投射と純粋な探索の手段ともしていきます。

・アルンシュタットの教会オルガニスト

1707年7月にアルンシュタットの教会のオルガン（2手鍵盤と16本の美しい音栓を備える）の鑑定を頼まれたセバスティアンは、13日の公開の試奏にて聴衆を仰天させ、即時そのオルガニストに選ばれます。若いオルガニストとしては好条件での契約でした。8月14日に就任したオルガニストとしての仕事はオルガン演奏（日曜日、月曜日、水曜日）、ラテン語学校の生徒たちからなる小合唱隊の指導といったもので、作曲のための時間があり、近親の人々とも出会えました。人口4000人の住み心地の良い小都市アルンシュタット——そしてそこには遠縁のいとこ、マリーア・バルバラがいました。

・ヨーハン・ミハエル・バッハの娘、マリーア・バルバラ

マリーア・バルバラはセバスティアンとほぼ同じ年齢で、ともに孤児、ともに音楽を最重要視する家庭に育ちました。バルバラの資質はセバスティアンの個性と共鳴しながら純愛を育んだのでしょうか。中庸を得たセバスティアン——恋しながらも決然と、分別よく忍耐強く——地位を安定させた上での結婚に向かいます。

理想的に見えたアルンシュタットでの環境でしたが、やがてそれが錯覚と分かります。受け持っていた合唱隊の陣容は貧弱で程度が低く、バッハが意図したモテットやカンタータの難しいレパートリーの演奏は困難でした。30人ほどの少年のグループは規律なく、凡庸さに満ち、セバスティアンを苛立たせます。「老いぼれ山羊」と言われて怒ったファゴット奏者バイエルスバッハが、殴りかかってきたことによる流血未遂の不祥事は、しばしばバッハ伝に記される出来事です。

・ブクステフーデを聴くために徒歩で400キロ

事件後、合唱隊での仕事の継続を断ったセバスティアンは、4週間の休暇を得てディートリヒ・ブクステフーデの音楽を聴くためにリューベックの町に旅立ちます。北ドイツ最大の音楽家でバロック音楽の代表者とみなされていたブクステフーデは「夕べの音楽」

Abendmusikenと名付けられた演奏会をマリーア教会で指揮していました。4段の舞台に40人の音楽家が並ぶ最高水準のオーケストラにも、ブクステフーデ本人にも、セバスティアンは圧倒的な印象を受けます。

〔ホルステン門が印象的なリューベックは、東京バッハ合唱団第3回ヨーロッパ演奏旅行（1993年8月）で訪問した町の一つでもあります。旅の前半で北ドイツの町を次々と訪れましたが、立ち寄った教会で耳にしたト長調の《プレリュードとフーガ》がイ長調で聞こえると驚いている人がいて、北ドイツの町では当時のキーの地域差が現在にも継承されているのだろうかなどと考えたものでした〕

・バロック様式、ヨーロッパ的現象

建築と彫刻に始まったバロックの精神はやがて音楽にも浸透し、17世紀～18世紀前半には各国固有の気質を反映して形成されます。溢れんばかりに感覚的なイタリア、合理的で線状のフランス。両者を混合し古いポリフォニーによって実現しようと試みるドイツは転調の多用と器楽法の飾りの豊かさでポリフォニーの厳しさの緩和を見出しました。これらの魅力にとりつかれたセバスティアンは4週間の期限を意に介することなく、芸術に傾倒し、食欲に摂取し、特にコラルの領域でそれを取り込むことに専念します。

・コラル、典礼と音楽の橋渡し

この時期にセバスティアンは一つの音楽形式を探求、ここでルター派の典礼の柱をなすコラルがセバスティアンの全作品の縦軸となります。宗教改革を行なうルターが新しい礼拝の模索とともに導入した信徒会衆で歌われるコラルは、プロテスタントの礼拝の柱となり、17世紀ドイツ音楽の跳躍台となり、バッハの天才によって古典主義への道を拓くものとなります。

68歳のブクステフーデから継承者としての提案を受けたものの、その娘との結婚という附帯条件もあってか、セバスティアンは4ヶ月に渡るリューベックでの滞在を終えて帰ります。

・アルンシュタットからミュールハウゼンへ

アルンシュタットの聖職会議での冷ややかな対応に加え、感化を受けたセバスティアンがブクステフーデ風にオルガン即興演奏を始めることで事態は悪化していきました。会衆は仰天し、狼狽し、茫然自失。「信徒会衆をまごつかせるような奇妙な和音を混入したコラルによって、数多くの怪しげな変奏をした」かどで、彼は告発されます。「人々が納得できるくらいに十分な長さで調を維持し、とっぴな調性のなかに踏み込むような危険を冒さぬこと、対立する調性のあいだをあちこちさまよい渡らぬこと……」といった申し渡しを受けたバッハが今度は極度に短い前奏を弾くと、そこにも非難が……。加えて聖歌隊席にマリーア・バルバラがいたことをも非難されました。

そんな折、ミュールハウゼンのブラージュス教会のオルガニスト、J・ゲオルク・アーレの死去に伴いバッハ

に機会が訪れました。1707年の復活祭、4月24日に行なった彼の演奏は人々を魅了し、前任者を上回る報酬、条件をもってバッハはオルガニストとして迎え入れられます。

[ミュールハウゼンには、第4回ヨーロッパ演奏旅行(1997年8月)で立寄り、短時間でしたが素敵な町並みが印象に残っています]

・1707年10月17日、ドルンハイム(アルンシュタット近郊)の小さな教会で、セバ스티アンはマリーア・バルバラと結婚

[前記の第3回演奏旅行では、このドルンハイムの教会を訪れる機会もあり、一部工事中でしたが美しく親しみの持てる会堂と周囲の景色が、関連の深いBWV 196の響きと共に心に残っています]

22歳となったバッハは家庭生活を保障するに足る堅固な安定した状態にありました。アルンシュタットにいた時より高いオルガニストの地位を得、前任者とその息子の路線を継承しつつ、精力的に活動します。バッハは旺盛な創造期に入りました。オルガン維持という契約義務の範囲を超え、バッハは音楽全体に携わり、期待を上回るその活動を行います。演奏曲目の更新に専念し、教会の図書館のためにブクステフーデを含む北ドイツの巨匠たちのカンタータの書き写しなども行ないました。近隣の村々の音楽家たちとも出会い、自身の作品を分け与え、音楽は満ちあふれました。

・最初のカンタータ群

いずれも人気の高い以下の作品が挙げられます。

○BWV 131《深みより 主よ われはなれを呼ぶ》Aus der Tiefe rufe ich, Herr, zu dir バッハの最初のカンタータ作品(1707年)。○BWV 71《主は わが君》Gott ist mein König (神はわが王) 好評でバッハ生存中に印刷された唯一のカンタータ。○BWV 4《キリスト 死につながれしが》Christ lag in Todesbanden 1708年復活祭の日付をもつ。○BWV 106《神の時はいと正し》Gottes Zeit ist die allerbeste Zeit 葬送カンタータ、1708年6月13日演奏。○BWV 196《主は覚えたもう われらを》Der Herr denket an uns 結婚カンタータ、1708年7月5日演奏。

・「カンタータはレチタティーヴォとアリアとで構成されたオペラ作品に似ている」

バッハのために多くの歌詞を提供したハンブルク



の牧師、エールトマン・ノイマイスターは1700年頃カンタータを上記見出しのように定義しました。語彙上は、ソナタあるいは「鳴り響く[器楽]作品」に対して、「歌われる作品」であるカンタータは、17世紀初頭にイタリアに現れました。当時は広い意味での声楽作品で、1声か数声部のための通奏低音つき、また時としていくつかの「オブリガート器楽」を伴ったものであり、アリアと合奏とがレチタティーヴォと交互に現れるというものでした。その後、楽器編成が豊かになり、18世紀初頭には合唱が導入されるようになりました。

ドイツでは「カンターテ」Kantate、フランスでは「モテ」motet あるいは「コンセール・スピリチュエル」concert spirituel、イタリアでは「オラトリーオ」oratorio と呼ばれるこれらの用語は宗教的作品のことを指しています。

かつては、ほとんどすべての歌詞が聖句またはコーラルの詞節をもとに着想されていましたが、バッハの時代になると自由に解釈されたものとなりました。こうした傾向の中でも、いくつか過去に遡る音楽もあり、たとえば《キリスト 死につながれしが》においては12世紀の旋律に基づきつつ、ルターのコーラルの歌詞を全体に用いています。

・〈整った音楽〉の2つの解釈

ミュールハウゼンでの仕事も、やがて苦いものに変わっていきました。音楽の質を重んじるバッハの尺度と厳格な規範、地域の慣習とは相容れません。「整った音楽」として「地方の伝統に従う」ことを求められる中で、バッハは「真の教会音楽の精神に従うこと」に尽力しますが、権威があらゆる革新を黙殺することで、バッハが自らの心に従って教会の音楽を実践する事ができなくなってしまいました。

・牧師同士の争い

ミュールハウゼンの2つの主要な教会の牧師の間では1699年以来、教義上の論戦が持ち上がっていました。ブラージュス教会のJ・アドルフ・フロネ牧師は敬虔主義に傾倒、一方マリーア教会のクリスティアン・アイルマル牧師は厳格な正統派の教義を表明、バッハの到着に伴いこの論争が再燃しました。信仰の主観性に重点をおく前者は教会の硬直からの反動から生まれ、プロテスタントの礼拝を浄化しようとしませんが、不幸にも音楽がその最初の犠牲になりました。バッハは宗教との内面的、個人的かわりの意味で心情的には敬虔主義者でしたが、美しい音楽に敵対する考えを持つ敬虔主義でなく、音楽を神に栄光を帰する最高の手段とみる正統主義を選びます。

このような中、着任後1年も経たずに、「このような環境にあって、私の奉仕にもっともふさわしい報酬の得られるような、予期せぬ地位が与えられました」とバッハはヴァイマルの宮廷への転職を願い出ました。

[つづく]